

第一部 「対話と連携の博物館」の新展開

子どもワークショップの企画・運営の担い手として

認定特定非営利活動法人大阪自然史センター（はくラボ）・高槻市立自然博物館 五月女 草子
認定特定非営利活動法人大阪自然史センター（はくラボ） 山中 亜希子

はじめに

大阪市立自然史博物館（以下、博物館）では、毎月2日間、夏休み期間中は毎週末の土日に「子どもワークショップ」を開催している。これは、博物館の数ある行事の中で、一番小さな子どもたちに向けたやさしい内容の行事である。「小さな子どもたちに、もっと博物館を楽しんでほしい」、「展示の面白さを伝えたい」、そんな思いで2004年から始まった子どもワークショップは、認定特定非営利活動法人大阪自然史センター（以下、センター）の教育スタッフと、博物館の学芸員が協働で進めており、今年で14年目を迎える。

本稿では、博物館で行われている子どもワークショップが始まったきっかけと企画・運営についての事例、そして今後の展望について述べる。

子どもワークショップが始まったきっかけ

14年目を迎える子どもワークショップのプログラムは、2017年現在で100種類を超える。そのテーマは、子どもたちに人気の恐竜や昆虫、化石、動物や植物など多岐にわたる。このように多種多様な子どもワークショップが始まったのは、2004年にセンターに教育スタッフが配置されたことがきっかけだ（佐久間ほか，2017）。子どもワークショップが始まる以前から、博物館の学芸

員による観察会や講座は頻繁に行われており、それは現在でも同様だが、教育スタッフの配置によりこれまで以上に学習者中心、つまり子どもの疑問や発想に寄り添った内容の行事を行うことができるようになった（佐久間ほか，2017）。合わせて、博物館の展示は「見る」「読む」という少ない要素の動作を行って理解を深める内容のものが多く。しかし、小さな子どもにとっては、「さわる」「試す」「考える」「疑問をその場で質問する」「誰かと会話をする」「真似をしてみる」などの複合的な行動が伴ったほうがより学びにつながりやすく、記憶にも残る（ジョージ・E・ハイン，2010）。そのような点からも、教育スタッフが子どもと展示の間に介在し、遊びや工作の要素も交えた内容の子どもワークショップは、それまでの博物館にはない子どもへの効果と魅力のある行事になった。その結果、14年もの長期にわたり継続して実施することができた。

子どもワークショップの企画・運営と目的について

子どもワークショップは、博物館が扱うテーマである「自然」に関して、その魅力や不思議を伝えるものだ。企画・運営はセンターの教育スタッフが、学術的な知識や資料は博物館の学芸員が提供し内容を作り上げている。言い換えれば、教育スタッフがエデュケーターの役割を担い、ワーク

ショップに参加する子どもたちが不思議に思うことや難解と感ずるであろう言葉などを考え、どのように組み立てたら効果的に伝わり子どもたちにとって意味のある内容になるかを検証する。一方、学芸員にはその道の専門家として、正しい情報とそれに最適の資料を提供してもらう。

教育スタッフと学芸員がワークショップを企画・運営する上で意識していることは「テーマに対し子どもが理解しやすいような場づくりをすること」「子ども自身の発見を大切にすること」「正確な情報を伝えながらも、子どもの発想を大切にすること」だ。博物館の中で行われるワークショップという「場」に子どもたちが身を置くことで、自然の対象物にふれ、子ども自身が自ら考え経験する学びのプロセスを重視している（図1）。その経験から子どもの中で意味が生まれ、次の経験につながることを目的だ。「ワークショップでこんなことに気づいた」「ワークショップに参加した後、もう一度展示を見たら、あんなものを発見した」、そんな子どもたちの発見への入口を作ることができたらと思う。

「ワークショップを通じて自然に興味を持ってもらい、ゆくゆくは学芸員や研究者になる子どもを育成することを目指しているのですか」と、参加する子どもの保護者や博物館の学生ボランティア



図1. ルーペで標本を見る子どもたち。

アから質問されることがある。もちろん、ワークショップで扱うテーマは自然なので、自然に関する多様な領域に興味を持ってもらいたい思いはある。しかし、子どもワークショップの目的は、参加してくれた子どもたち全員を専門家に育成することではない。現場で目指しているのは、子どもたちが身の回りにある日常の自然に気づき、自分の経験と結びつけること、また自然を通じて世界を理解し、新しい見方ができるようになることだ。その経験の先に、自分の好きなことや興味のあることを見つけてもらいたい。それを見つけてきた子どもは、きっと自分の人生を力強く生きていくことができるだろう。子どもたちの生きる力の助けになるような、そんなきっかけの場になり得るのが博物館であり、また博物館の大きな役割の一つであると考えている。

次に具体的な事例を紹介する。子どもワークショップは、主に教育スタッフがファシリテーターとなり進行するワークショップと、学芸員が担当専門分野の「ハカセ」として登場するワークショップ（以下、ハカセワークショップ）の大きく2つに分けられる。前者のワークショップは、ふらりと来館した家族や子どもが気軽に参加できるように、実施時間が約30～40分程度の短いものが多い。対して、ハカセワークショップは、ハカセの案内で展示室を回ったり特別な標本を見たり、ハカセに質問したりしながら進める内容が多く、実施時間は約60分と、学校の授業と比較しても長い「じっくり型」だ。ハカセワークショップは、学芸員と教育スタッフの二者がファシリテーターとなり、子どもたちに質問を投げかけたり、学芸員の視点を教育スタッフが必要に応じて翻訳しながら進め、自然のことを考えたり、展示への興味を深めていく。教育スタッフと学芸員が話し合い、展示や標本、自然科学の面白さをどのように子どもたちに伝えるか、毎回試行錯誤

を重ねている。前者、後者のワークショップはともに、子どもにスケッチや工作をしてもらうことが多い。それは、自らが考えたこと、理解したこと、想像したことなどを振り返りながら形に落とし込むためである。さらに出来あがった成果物は子どもによって家へ持ち帰られ、家族との会話のきっかけや、その日のワークショップや博物館での体験を、振り返りながら他の誰かに伝えるという役割も果たしている。

事例紹介

2015年夏には、「じっけん！タネたねハカセ」という新しい試みのハカセワークショップを行った。先述の通り博物館でのワークショップは、教育スタッフやハカセ役の学芸員が導入の話をした後に工作を行うという流れが多い。この実施方法のワークショップは定着しており、子どもたちにも人気であるが、一方で子どもの参加動機が「何かを作ること」になりやすい面も持ち合わせていた。より子どもたちが中心になって考えたり、実践できる内容のワークショップを企画・運営できないだろうか。そう考えていた時、学芸員の「子どもたちに科学的思考と科学的実験の手法を伝えたい」という提案から、実験を中心に行うワークショップを提案者の学芸員と教育スタッフとで企画・運営した。このワークショップでは、タイトル通り、実験する時間を多く設けた。テーマは植物のタネの散布方法についてであり、いろいろなタネがどのように拡がって行くのかを考える内容である。準備したタネは3種類で、子どもたちはそれらのタネの移動方法を、形や特徴を観察しながら坂をころがしてみたり、水に浮かべてみたり、うちわで風を起し飛ばしてみたりという実験を行いながら考える（図2）。ハカセ役は植物担当の学芸員なのでタネの生態に詳しいが、そのこと



図2. タネを水に浮かべる実験をしている様子。

を口に出しては言わない。ただ実験の仕方やタネの見方をアドバイスするのみである。実験の中で子どもたちは「このタネは浮くけど、別の種類のタネは浮かない」「この実験方法は、このタネには適していなさそう」などの発見をしていた。一通り実験が終わったのち、それぞれの子どもたちの実験方法と結果、そして考察を発表し合った。最後にハカセが、現在の学説、このように拡がると考えられている、という話を子どもたちにした。

このワークショップの中で興味深かったのは、ヒメモダマのタネで実験していた子どもの発見だ。このタネは基石のような平べったい丸い形をしており、一般的には水に浮いて散布されると言われているが、数人の子どもたちがモダマを坂で転がす実験をした時に、平面部分を地面につけると転がらないが、円周部分が地面につけばとても早く転がっていくことを発見した。この発見にはハカセ役の学芸員も驚いていた。ワークショップを通して子どもだけでなく、実施者である教育スタッフや学芸員にも新しい視点や思考を与えてくれた。また、多くの子どもたちが「工作すること」ではなく「自分で考え、試してみること」に熱心に取り組む姿を目の当たりにし、今後のワークショップの新しい展開の可能性を感じた。

今後の展望

このように、試行錯誤を重ねつつ、新しい取組みにもチャレンジしながら企画運営ができているのは、14年間もの長期にわたり、同じ博物館の現場でワークショップを実施することができた継続性の賜物であろう。今後もワークショップ内容のさらなる向上を行い、多くの子どもたちに博物館や自然を楽しむヒントを届け、子どもたちにとって意味のある経験ができる場を提供したい。

しかし、子どもワークショップ事業は、2013年度からは大阪市博物館協会との単年度ごとの契約制となり、長期的な計画を立てて実施することが難しくなった。同時に、契約制のため毎年2月には次年度契約に向けてプロポーザル方式で争うため、本事業への博物館内外からの視線は年々厳しさを増している。当然のことではあるが、本事業や企画・運営を行う教育スタッフは常に評価される立場となる。第三者からの評価はどうしても「参加人数」にばかり注目されることが多い。これはワークショップに限ったことでなく、博物館業界全体が持つ大きなジレンマであろう。もちろん、多くの子どもたちに「参加したい」と思ってもらえるような魅力あるワークショップを企画・運営すること、そして実際に参加してもらうことは大切だ。しかし、参加人数が子どもたちの満足や意味のある経験に直結しているかといえば、そうではない。先述の通り、子どもワークショップの最終的な目的は、子ども自身が経験し発見することで、自然に対する視点に出会い、自分の興味のある世界を見つけてもらうことである。それを数字で推し量ることはとても難しい。現場に立

つ教育スタッフができることは、参加人数という数字での説得の重要性は理解した上で、子どもの経験を知るためにアンケートを継続的に行うことや、ワークショップの実践者として子どもの様子を観察・記録し、ワークショップの目的を達成することができたかを振り返る冷静なまなざしを持ち続けることであろう。そのまなざしとは、単に子どもの様子を見ることではない。子どもの中でどのような意味が生まれているかを知る努力であり、それは子どもへの問いかけや関わり方の工夫、子どもの小さな言動にどんな意味があるか捉える技術であろう。

こうした技術は、博物館の現場で数多くのワークショップを長期的に実践し、同時に理論を学んでいくことで向上できる。教育スタッフはそれらの技術を向上させ、その結果からわかった子どもの様子を第三者にも理解してもらえよう情報発信していくことで、新たな評価基準を確立させたい。情報発信の方法は試行錯誤の段階であるが、現場に立つ教育スタッフだからこその発信を行っていきたい。

引用文献

- ジョージ・E・ハイン. 2010. 第8章構成主義に基づく博物館. 「博物館で学ぶ Learning in the Museum」(鷹野光行監訳), pp. 245 - 247. 同成社, 東京.
- 佐久間大輔・横川昌史・釋知恵子・山中亜希子. 2017. 自然史系博物館における子どもワークショップの展開と課題. 子ども博物館楽校, 7: 18 - 25.